

結んでおり、経営陣、技術者の交流が続いているという。こうした新しいチャンネルをどのようにより確かで太い流れにしていくかが、インドネシアにおけるパーム油・アブラヤシ関連産業の基盤を強化し、そこでの雇用を維持・拡大していくために、今後の両国間関係が抱える課題として問われている。

——おわりに

インドネシアで産出される化石燃料は、現在なお日本において貴重な資源として私たちの暮らしを豊かなものにしてくれている。しかし、従来そうした自然資源の産出と消費を通じて、あるいは日本企業の現地進出に関連していえばインドネシアにおける低廉な労働力と日本企業の資本・技術という点で、相互に補完し合ってきた両国の関係に、日本企業の現地への進出がインドネシアで自生してきた土着の産業であるアブラヤシ・パーム油生産の基盤強化と発展に寄与する可能性を高めつつあるという新たな要素が加わってきていることが、以上の議論で明らかになったと考える。

また、私たち日本に住む者は、インドネシアで生産されたバイオ燃料が、森林資源へのダメージをより少なくしながら生産されたものであるかどうかに関心を払っていく必要があるだろう。インドネシアの農園の老朽化したアブラヤシの木を植替えるために、日本から何ができるかが問われている。そうしたことすべてに持続して関心の目を向けることが、インドネシアの地方に住む人々の雇用・労働力受容増という「副産物」を一時的なものに終わらせないためにも、そして彼ら現地の人々のみならず私たちにとっても大切な自然資源の代償をより少なくするためにも、重要である。

〔付記〕本稿は、2008年10月18日（土）に和光大学にて開催された、日本・インドネシア国交正常化50周年記念・2008年度公開シンポジウム（和光大学総合文化研究所主催）・第1回「日本・インドネシアにおけるエネルギー問題の歴史と現在」において行った報告の原稿を大幅に加筆修正したものである。和光大学の先生方を始め、ご関係の皆様へたいへんお世話になりました。記して感謝申し上げます。

〔はやしだ ひでき〕